

江戸時代における『聊齋志異』の受容

—『蛸洲餘珠』を例に—

磯部 祐子

富山大学人文学部紀要第64号抜刷
2016年2月

江戸時代における『聊齋志異』の受容

―『蛸洲餘珠』を例に―

磯部 祐子

一 はじめに

「聊齋癖（マニア）」という言葉がある。『聊齋志異』をこよなく愛し、魅せられた人々をいう。このことばの源は、『聊齋志異』に註を施した呂叔清の遊印にあるらしい。そのことを紹介した、柴田天馬という新聞記者も、日露戦争の時、朝鮮新聞の特派員として遼寧省安東へ行き、暇つぶしに『聊齋志異』を読んでからその癖に陥り、大正八年に『和訳聊齋志異』を出版、その後昭和二十六年から二十七年にかけて本邦初となる『聊齋志異』の全訳出版の偉業を成し遂げた。もちろんそれ以前、明治二十年には、『聊齋志異』の抄訳本である神田民衛『艶情異史・聊齋志異抄録』（明進堂）があり、石川鴻斎『夜窓鬼談』（明治二十一年）にもその影響が窺えることは指摘されている。また、大正以後は、何人もの作家が『聊齋志異』の作品を翻案した。芥川龍之介の「酒虫」（大正五年）や、太宰治の「清貧譚」（昭和十六年）「竹青」（昭和二十年）などは良く知られる。

そもそも、日本に『聊齋志異』が入って来たのは江戸の後期である。『商船載来書目』には明和五年（一七六八）に一部舶載されて

1 柴田天馬訳『聊齋志異』第一巻序言（角川文庫 昭和四十六年第五版）三頁。

2 相田洋『シナに魅せられた人々』（研文出版、二〇一四）三二―四頁。

3 陳炳崑「『夜窓鬼談』と『聊齋志異』にみる幽霊と冥界」『南台人文社會學報第二期』（二〇〇九）などに見える。

いたことが記されている⁴。今日残る『聊齋志異』の最も古い版本は、趙起杲『青柯亭刻本聊齋志異』で、乾隆三十一年（一七六六）に上梓されたものであることから、刊行して何年も経たないうちに日本にもたらされたことになる。しかし、江戸時代の具体的な受容についてはほとんど明らかにされていない。僅かに、一九八〇年代に、徳田武氏によって、都賀庭鐘が天明六（一七八六年）に『聊齋志異』「恒娘」を翻案したこと⁵、森島中良の「風草紙」（寛政四年刊）九話仕立てのうち七話が『聊齋志異』の翻案であること⁶などの指摘がなされたにとどまる。

筆者は、文政年間に富山の漢学者によって書かれた漢文小説『蛸洲餘珠』を読む中で、その作者にも「聊齋癖」があったことを知った。『蛸洲餘珠』を通して日本における「聊齋癖」の早い例をここに紹介したい。

二 「聊齋癖」をもつ漢学者（『困譚』及び『蛸洲餘珠』の作者）との出会い

「聊齋癖」をもったその人物の名は寺崎蛸洲（一七六一～一八二二）という。筆者は、以前、蛸洲の漢文笑話『困譚』を読み、その解説書を『江戸の笑い』（二〇一二年、桂書房）と題して出版した。その中の一話に、かつての酒飲み友達と久しぶり出合つて久闊を叙す場面があったが、その箇所は「各道契闊」という四字で記されていた。その後、たまたま目を通した『聊齋志異』⁷第四卷「酒狂」に、酒癖の悪い男が死後にあの世で翁という姓の旧友と会つて挨拶する場面が、やはり「各道契闊」という四字で記されていた。「酒」と「各

4 大庭脩『江戸時代における江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、一九六七）。なお、注4に示すに示す徳田武氏の論文においても言及されている。

5 徳田武「庭鐘と『聊齋志異』——『秀句冊』第三篇覚書——」（『近世文芸研究と評論』第二十二号、一九八二）、後、『日本近世小説と中国小説』（平成四年、青裳堂）に再録される。

6 徳田武「『風草紙』と『聊齋志異』」（『近世文芸研究と評論』第十八号、一九八〇）、後、『日本近世小説と中国小説』（平成四年、青裳堂）に再録される。
7 『聊齋志異』の版本は多種あり、また、蛸洲が目にしたと思われる趙起杲「青本刻聊齋誌異例言」を付す版本も異本があるため、小論では、『聊齋志異』の巻数は、趙起杲『青柯亭本聊齋志異』をも対校本としている会校会注会評本『聊齋志異』（張友鶴輯校 上海古籍出版社 一九六二）に随う。

道契闊」という二つの共通項にその時はさほどの関心も抱かなかったが、やがて、『高岡詩話』（津島北溪著、一八六一年頃成立）⁸所収の蛸洲作「竹枝詞」に、蛸洲と『聊齋志異』との関わりを再び窺うことになる。それは次の詞である。

首蓓花飛春已稀

首蓓の花散り 春ももう終わり。

秋千格五惜斜暉

ブランコ、五目並べ、興も尽きぬにもう日暮れ。

雛姫亦識阿嬢意

半玉 女将の意を汲みて、

両手又扉不許歸

両手もて扉を又いで客を帰さぬ。

「両手又扉」ということは、半玉が腕で×の字を作つて客を留める仕草をいい、僅かに『聊齋志異』第十卷「珊瑚」に見える。原文の特徴をできる限り生かして日本語訳を試み、見事な翻訳を行った前掲の柴田天馬は、その四字を「両手を又ひらげて扉の所に立ちふさがった。」⁹と訳している。

当時、遊郭は文人の社交の場でもあり、漢文をものする文人間に遊郭の風俗を漢詩仕立てで歌う「竹枝詞」が流行していた。富山藩校教授でもあった市河寛斎（一七四九—一八二〇）の『北里歌』はその先駆けとして極めて有名である。蛸洲もその流行の中で幾つかの「竹枝詞」を残しているが、この一首はその一つで、客を帰したくない女将の意向を汲んだ半玉のけなげな様子を「両手又扉」という『聊齋志異』に見える一語によって表したのである。

その後、その著『蛸洲餘珠』を紐解く中で、蛸洲の『聊齋志異』に対する強い愛好を知ることになった。

『蛸洲餘珠』は、文政二年に編まれた短編小説集で、長崎浩斎によって記された序文に依れば、蛸洲は誤りのない正しい漢文を世に出したいとの念（先生曰我亦欲三梓行）。雖^レ然、其意異^ニ子所^レ言。抑近人所^レ撰諸書、不堪^ニ訛字錯文之多^一。此皆為^ニ倒飛讀^一所^レ誤故耳。護園諸老、論^レ之喋喋。伊藤皆川二塾、常習^ニ射復文^一。輒我弄^レ筆、亦唯恐有^ニ舛錯^一。何遊目駭耳之為焉。譬如^ニ堂郎掣^レ鯛、不知^ニ

8 『高岡詩話』（高岡市立中央図書館、二〇〇五年）の各頁上部所載の原本に基づくが、そこに付された訳文は採用しない。

9 『聊齋志異』全四冊第二冊（角川文庫、昭和四十四年）

傍在_レ雀。即如_二吾誤_一、問_二後之為_レ雀者_一乎。遂授_二劊劊_一。』から記したという。全四十二話から成る『蛸洲餘珠』の解説と翻訳については、今年度中に桂書房から出版する予定であるが、小論では各話の内容を示すため、原文のタイトルとともに筆者によるサブタイトルを以下に掲げる。

蛸洲餘珠卷上目録

- 第一話 六治古―始祖伝説・孝行息子にサケが恩返し―
- 第二話 列婦―死を恐れず操を守り抜いた女のはなし―
- 第三話 繪賈―京商人、天明の大火に地獄を見る―
- 第四話 某公子―遊郭遊びの悪ふざけ―
- 第五話 百盲顛踏―けちな医者、祝儀を惜しんで盲人をなぶる―
- 第六話 宇賀京輔―生き別れた夫婦、討ち入りの日に再会を果たす―
- 第七話 狐二則―狐の話二つ―
- (一) 狐の免を横取りし、仕返しに人の子の死骸を食わされた下男のはなし
- (二) 狐をからかい、仕返しに蛇の卵を食わされた山伏のはなし
- 第八話 浴戸某女―凶太い風呂屋の娘、問男しても何喰わぬさま―
- 第九話 婉童―貴人の粹な計らいで、妾と童が晴れて夫婦に―
- 第十話 鱒―他人の禪で相撲を取って、うなぎに馬鹿にされるはなし―
- 第十一話 毛佛翁―毛坊主におちよくられその気になる下女のはなし―
- 第十二話 画眉鳥―江戸の貴公子、画眉鳥に導かれ謎の美女との再会を果たす―
- 第十三話 某貴紳―風流な貴人、洒落た趣向で客の胆を冷やす―
- 第十四話 禿醫―居留守を隠そうと考えた苦心の策も風呂桶ころんで水泡に帰す―

第十五話 茜姫―美しい姉の髑髏を取り戻す―

第十六話 蜃樓―悪人の横恋慕で引き裂かれた夫婦、竜宮王の恩返しで救われる―

第十七話 紅唧唧―その鳥の脳血で描かれたものは画から飛び出して動くと言う―

蛸洲餘珠卷下目録

第一話 蒲留仙―友・服部叔信と『聊齋志異』を語る―

第二話 義経公―奥州へ向かう義経一行の狐退治―

第三話 胡僧―「バテレン」のこと―

第四話 豪飲―焼酎を飲み、吐く息に火がついて死んだ大酒飲み―

第五話 地震―大地震で地中に埋められ、十二年後、大地震で地上に出てきた男のはなし―

第六話 池貸成―鷹揚で洒脱な文人画家―

第七話 眩術二則―目くらましの術二つ―

第八話 啞蟬―目の錯覚―

第九話 木判官―高祖民部公の伝説―

第十話 嵯峨隠士―鳴かぬなら敲いて鳴かそう―

第十一話 兒入鐘腹―奇跡的に助かった二人―

第十二話 鍵襖―自画像を奉納して貞操を誓う―

第十三話 悪鱒―本質を見極めることのむずかしさ―

第十四話 鶴塔―天の使い「コウノトリ」―

第十五話 漆工―親鸞を信じ乞食を助けた漆塗り職人、富豪になること―

第十六話 赤剝村僧―力持ちの僧侶―

第十七話 魑僧―大泥棒の稲葉小僧―

第十八話 白線―すごい女―

第十九話 鶯鬼―ウグイスの霊―

第二十話 五萬度山―瑪瑙の産出地―

第二十一話 金光燭天―天に光る謎の炎―

第二十二話 剪扭―近づく女にスリとは知らず―

第二十三話 鵬―獐猛なタカ―

第二十四話 復讐―仇を討たない理由―

第二十五話 仙童―ロードス島の巨人を見た少年―

跋 蛸洲の詩才―忠臣蔵を詠む―

なお、作者・寺崎蛸洲についての詳細な紹介は、前掲『江戸の笑い』の記載に譲り、以下に『高岡詩話』を引用するに止める。

「寺崎蛸洲翁は、村瀬栲亭に学び、また、皆川淇園に学ぶ。寛政年間から文政初季にかけて、詩壇の中心人物として仰がれた。稗史小説¹⁰を最も好んだ。蛸洲には『蛸洲餘珠』上下二巻、『困譚』一卷及び『狐茶袋』などの著作があり、出版されている。(寺崎蛸洲翁、学村瀬栲亭、又学皆川淇園。自寛政年間、至文政初季、仰為詩壇主盟。尤好稗史小説、有『蛸洲餘珠』二巻、『困譚』一卷、及『狐茶袋』等著、刊行于世。)」

ここから、蛸洲は、当時の高岡の地で文壇をリードする「主盟」であったことが窺える。高岡は、地方の小さな都市とはいえ、江戸の後期は、加賀藩二代藩主前田利長の菩提寺瑞龍寺が置かれた地として、学問は盛んで、中央の文人の来訪があり、中央で医学を修める者を多く輩出していた。

10 稗史小説とは、稗官小説ともいい、説話や物語を指すものと思われる。

三 『蛸洲餘珠』「蒲留仙」に見るその「聊齋癖」

『蛸洲餘珠』四十二話のうち、作者の「聊齋癖」を最もはっきり見ることができているのは、「蒲留仙」と題する一話である。以下に原文及び訳文を掲げる。なお、留仙とは、『聊齋志異』の作者である蒲松齡の字であり、松齡はその諱で、号を柳泉という。

〔原文〕余友服輓、字叔信、號「楓翥」。南郭先生後也。穎異絕倫、弱冠時能講「靈臺儀象志」、聽者稱讚。亦喜讀「聊齋志異」、嘗題之曰、近時珍編奇冊、翰林頗夥、而是一書最行于世。趙起杲曰、初稿名「鬼狐傳」。後留仙入棘闈、狐鬼群集、揮之不_レ去。以_レ意揣_レ之、蓋恥「禹鼎之曲傳」、懼「軒轅之畢照」也。歸乃增「益他條」、名_レ之曰「志異」。其非「異常之筆」、豈能若_レ此也哉。抑棘闈招_レ神、回煞躡_レ殃、都如「術士追魂法」。其事甚奇。又青鳳傳、留仙得意之作也。同社畢怡庵讀_レ之、深慕「其姣麗」。後竟得_レ與「狐女」綢繆_上。而狐亦羨「青鳳」、陰囑「怡菴」請_レ留仙作「己小傳」。要_レ之皆醉「其文」者也。余友木蛸洲曰、如「嫦娥鳳仙諸傳」、亦極「翦裁之妙」。每讀「此等編」、未_レ必世態風月不_レ聳然感傷也。輒欲_レ語_レ人以_レ侑「茗酒」。然纔掩_レ卷、茫乎若_レ海市蜃樓不_レ可_レ復認也。余曰、是子亦醉「文章」故耳。如「其事」何足_レ便舉以語_レ人、相為一笑而已。噫、讀「柳泉書」者、勿_レ以「怡菴」笑_レ「怡菴」。

書畢就_レ寢、忽有「二胥」、拽以抵「一衙署」。中有「儒冠」公一坐。呼_レ叔信一至_レ前謂曰、我蒲松齡也。以_レ汝喜「文辭」請_レ冥司、令_レ托_レ生於曹太史家_一。汝枕_レ藉于四庫全書中_一、十六歲當_レ擢_レ翰林_一。雖_レ然、是非「吾素志」、亦數也。速其了_レ後事_一。叔信順受、不_レ敢亦違_レ之。公仍命_レ前胥_一送還。愕然醒。果遂數日而卒。

予家貧、虧_レ叔信_一實如_レ管仲於_レ鮑叔_一也。而未_レ能_レ報_レ其萬分_一。叔信有_レ大著作_一、則欲_レ以_レ助_レ校讎_一。未_レ知留仙招_レ我在_レ何日_一也。叔信年劣三十三、其咏_レ落葉詩_一曰、霜飛爛漫簇_レ紅楓_一、川錦吳綾詩景中。一夜西風都落木、滿山秋色入_レ樵籠_一。蓋絕筆也。

11 原文は「果」と作るが、本来は「杲」であるため、以下「杲」に改める。

12 原文は「怡」と作るが、本来は「怡」であるため、以下「怡」に改める。

蓮香傳、其鬼狐合葬時、不_レ期而會者數百人云。是似_二實有_一其事_一矣。唐山固多_二靈狐_一、但見_レ鬼之多、何也。蓋亦如_二吾邦幽靈天狗談_一、文人假_レ之弄_二筆墨_一耳。

〔訊文〕私の友人の服靴は、字を叔信といい、号を楓翁かふうという。服部南郭先生の子孫である。才は凡人に抜きんで、二十歳で、『靈臺儀象志』（天文の学）を講じ、聴講した者はみな褒め称えた。また『聊齋志異』を読むことを好み、次のような題辞を書いた。

近頃、珍しい本の数は実におびただしいほどあるが、この本が一番読まれている。（編集者の）趙起杲（青柯亭刻本『聊齋誌異例言』）は、『初稿は鬼狐傳という名であった。後に（作者の）留仙が科挙の試験会場に行ったものの、狐や幽霊が群集してきて振るい去ろうとしても去らなかつた。その理由を推測すれば、（禹の時代に鼎かまに遠国の諸物を描いて知らせたように、この狐や幽霊が自分のことを）詳しく伝えられることを恥じ、（軒轅鏡のように）ことごとく彼らを照らし全てが明らかになることを恐れたためであろう。そこで、（留仙は）帰宅して他の話も書き足して志異と名付けた。』と言う。人並み優れた文才がなければ、どうしてこのように素晴らしいものが書けようか。そもそも、科挙の試験場に神を招いたり、死者の魂を呼び戻して崇りを避けたりするなどいうのは、どれも法術士が魂を追い求めるやり方だろう。これは、極めて不思議である。又、『青鳳伝』は留仙（蒲松齡）の自慢の一篇である。同じグループに属する畢怡庵（『聊齋志異』「狐夢」に作者の友人として登場している）がこの小説を読み、青鳳の美しさをこよなく慕っていた。後、（畢怡庵は）狐女と親密になったが、狐も青鳳を羨んで、こっそり怡庵に頼み、留仙に（「青鳳伝」のように）自分の伝記を作ってくれるようにお願いした。要するに（先に述べた人々は）皆、その文に酔った人々である。私の友人の木崎洲ぼくれしゅうは言った、『嫦娥、鳳仙伝のような作品は文章の構成が極めて見事である。これらを読むたびにいつも、人情色恋に肅然と感傷を催さないことはない。そこでいつも誰かに話しながら一緒にお茶やお酒を飲みたいと思う。しかし、本を閉じると、蜃気楼が一たび消えるともう見ることができなくなるように朦朧もうろうとなってしまう。』と。私は言った、『それは君も文章に酔ったからだよ。そんなことは他人に話すまでもあるまい、君と僕とで笑うだけのことだ』と。ああ、柳泉の書を読む者は、怡庵の事を笑うことはできない。

（叔信が題辞を）書き終えて眠ると、突然、二人の小役人に引つ張られてある役所に連れて行かれた。中に儒冠をつけたひとりの役

人が座っていて、叔信を呼んだ。その前まで進み出ると、「私は蒲松齡だ。君は文学が好きなようだから、閻魔さまに、曹太史の家に生まれ変わらせるように頼んだ。君は四庫全書の中に寝起きし、十六歳になったら翰林（文章をつかさどる役所）に採用されるはずだ。しかしそれは私の意図するところではない、君の運命である。後事を速やかに終えよ。」と言った。叔信はそれに大人しく従った。やがて役人は先の小役人に命じて送り返させた。そこでハッと目が覚めた。果たして、数日後（叔信は）亡くなった。

私の家は貧乏であり、叔信に借りがあるのは（貧乏な）管仲が（お世話になった）鮑叔に借りがあるようなものだ。しかし、私はまだ万分の一の恩も返してはいない。もし叔信に大作があるならば、校正でもしたいと思うのだが、留仙が私を呼ぶのはいつのことだろう。叔信は僅かに三十三才であった。「落葉詩」に次のように詠う。「霜が一面に降り紅楓が群がっている、四川錦に呉地の綾が詩のよな景色の中にある、しかし一夜の西風にすべての葉は落ち、山の秋色はこの樵籠の中に入った。」と。おそらく絶筆であろう。

「蓮香伝」（『聊齋志異』の一篇）に幽霊と狐を合葬するとき、期せずして集まった者が数百人いたという。本当にそのような事があつたように思える。中国にはもとより霊狐が多いが、幽霊を見るのが多いのはどうしてであろうか。思うに、我が国の幽霊譚や天狗の話のように、文人がそれにことよせて筆を遊ばせたのであろう。

この「蒲留仙」一話は、叔信の異才ぶりを記して追悼しようという意図から出たものである。服部叔信は、本話にあるように服部南郭の末裔で、氷見布施（円山）の布施神社境内にある「万葉歌碑」を建てた人物。名は輓、号は楓翫、淳卿、横屋から天野屋へ養子に行き、詩・画・篆刻に巧みであったと、『高岡詩話』は伝える¹³。

13 『高岡詩話』に「清水少連第六子為淳卿。（名輓、一字叔信、号楓翫。称天野屋三郎左衛門。）出继服部氏後。能詩能畫、工篆刻。上酒井永光寺云、幾踏白雲尋梵宮、藤蘿路暗水淙淙。奚僮驚殺魂將絶、虎樣怪石龍樣松。佳句惜花云、初知憎雨如憎老、元是愛花緣愛詩。布施圓山碑、是人之所建。不特工詩、又頗有吏才云。（清水少連の第六子は淳卿為り。名は輓、一に字は叔信、号は楓翫。天野屋三郎左衛門と称す。出でて服部氏の後を継ぐ。詩を能くし畫を能くし、篆刻を工みとす。酒井の永光寺に上りて云ふ、「幾ど白雲を踏みて梵宮を尋ぬ、藤蘿の路は暗く水は淙淙たり。奚僮は驚殺して魂將に絶たんとす、虎様の怪石、龍様の松。」佳句に花を惜しみて云ふ、「初めて知る、雨を憎むは老を憎むの如きを、元これ花を愛して詩を愛するに縁る。」布施の圓山碑はこの人の建てし所。特に詩に工みなるのみならず、又た頗る吏才有りと云ふ。）と見える。

「蒲留仙」からは、また蛸洲と叔信両者が如何に『聊齋志異』を好んだかを窺うことができる。蛸洲は、叔信が記した『聊齋志異』題辭と叔信のみた夢に依りながら、『聊齋志異』に酔った叔信の様子を描く。しかし、そこには同時に、『聊齋志異』に酔った蛸洲の姿も描き出されている。

題辭は、まず、『聊齋志異』の編集者である趙起杲「青本刻聊齋誌異例言」のことばと『聊齋志異』の三篇の作品「青鳳傳」「狐夢」「嫦娥」を取り上げる。「青本刻聊齋誌異例言」を引いたのは、「其非^二異常之筆^一、豈能若^レ此也哉。(人並み優れた文才がなければ、どうしてこのように素晴らしいものが書けようか。)」というように、蒲松齡の才能を讃えるためである。その後、個々の作品の中から、その文章に酔った人々を紹介する。例えば「狐夢」一篇に登場する畢怡庵だ。畢怡庵は、現実にも存在した人物で作者・蒲松齡の友人のようであるが、「狐夢」の中では、「青鳳伝」に描かれた青鳳という美女に夢中になっている人物として登場する(「余友畢怡庵、倜儻不羣、豪縱自喜、貌豐肥多髭、士林知名。…畢每讀青鳳傳、心輒向往、恨不一遇。(自分の友である畢怡庵は、並みはずれた我儘者で、勝手な振る舞いを喜んでいたが、髭もじゃでふくらした顔の彼の名前は学者仲間にも知れ渡っていた。…畢は、いつも青鳳伝を読んで(青鳳に)心をひかれ、会えないことを恨んでいた)」。同じく、『聊齋志異』に酔ったものとして、「狐夢」中の狐が取り上げられる。この狐は、自分の伝記を書いてくれるように蒲松齡に頼んでくれと畢怡庵に願い出る(「然聊齋與君文字交、請煩作小傳、未必千載下無愛憶如君者(でも、あなたは聊齋と文学の友達だから、小伝を作ってくださいるように頼んでちょうだい。後の世になってあなたみたいに愛したり、思い出したりする者がなくとも限らないわ)」が、これは「青鳳」一篇中の青鳳が蒲松齡に伝記を書いてもらいたいとそれを羨んでのことだった。小説中の畢怡庵も狐も『聊齋志異』の世界に酔って、その話の人物を慕いその人と同じようになりたいと願うのだ、と叔信は記す。

ついで、蛸洲がかつて「嫦娥」、「鳳仙」の二篇を推したこと、そしてその文章に酔っていたことに触れる。「嫦娥」は、地上に降りてきた月の仙人「嫦娥」と狐の化身「顛当」の二人の女が宋という男と結ばれる話。「鳳仙」は、秀才の劉碧水が両親の死後、その財産で気ままに遊び暮らしていたが、自宅へ帰ると、狐のカップルが勝手に入り込んで逢い引きしていて、狐は慌てて逃げたため女性の袴(下着)を忘れて行ってしまった。翌日、使者がその袴の返還を求めに来たので、劉碧水がそのお返しとして鳳仙との仲を取り持つ

てもらうが、鳳仙も実は狐だったという話。蛸洲がこの二篇を推す理由は「剪裁之妙」即ち、「構成の妙」にあり、「読むたびにいつも、人情色恋に肅然と感傷を催さないことはない」からで、「それを誰かに話そうとすると鬚気楼のように消えてしまう」という。『聊斎志異』に酔った蛸洲の姿がここに記される。

叔信は、以上の題辭を書き終えた夜、夢に現れた蒲松齡に、来世のことはすでに閻魔に頼んであるから後事を速やかに終えよと告げられる。果たして、この数日後、叔信は世を去るが、死を前にして、その脳裏にはなお『聊斎志異』があった。叔信もまさに「聊斎僻」をもった人物であった。

最後に、蛸洲は、叔信の絶筆を載せた後、『聊斎志異』に幽霊譚が多いのは知識人の筆のすざびであったからだと結論したうえで、「蓮香」一篇中の、幽霊と狐の葬式に数百人が集まったという一文「不期而会者数百人」を引用し、実際にそういうことがあったのだろうかという。す。「蓮香」のストーリーは、ある生員のもとに美女が訪れて二人は懇ろになるが、しばらくして別の美女も訪れてやはり懇ろになる。その後、生員は二股を続け荒淫により衰弱死するが、美女同士は互いの存在を知って、生員死亡の原因を押し付け合い対決し、やがて、狐と幽霊であることが露見する。しかし、二人は離れられない二代の仲であった、というもの。幽霊と狐霊と人間とが渾然とした作品である。

先述のように『聊斎志異』の最も早い刊本『青柯亭刻本』は、乾隆三十一年の出版で、遅くともその二年後には日本に入っていた。また、蛸洲や叔信の生没年を考えれば、彼らは『青柯亭刻本』以外の版を目にした可能性は低い。当時、『青柯亭刻本』が日本に幾セットもたらされたかは知らないが、今日「漢籍データベース」上でも数セットしか見出すことはできないことから、蛸洲らは、中国書の流行に強い関心を寄せて何らかの手段で手に入れたのであろう。

四 『聊斎志異』に記された「こと」の借用

『蛸洲餘珠』には、「蒲留仙」以外に、「こと」と「ことば」の両面において『聊斎志異』の影響を受けたと思われる。まずは「こと」

について見る。

① 蛙曲の芸

『蛸洲餘珠』上巻第六話「宇賀京輔」は、別離し流浪する夫婦が、ある老人の予言どおりに討ち入りの日に再会を果たすという一篇である。その老人は気高く俗離れして、道を会得したもののような風貌で、「蛙曲」(蛙を鳴かせる芸)の使い手ということになっている。

「時有^二老叟^一、售^二蛙曲於市中^一。姿状高古、大類^二有道者^一。(たまたま老人が市で蛙曲の芸を売っていたが、俗人離れした姿で、道を悟ったものようであった。)」

では、「蛙曲」とは何を指すか。管見の限り、このことばは『聊齋志異』に作品名として見えるのみである。それはただその不思議な芸を紹介するだけの極めて短い一篇である。

「王子巽言、在都時、曾見一人作劇於市、攜木盒作格、凡十有二孔、每孔伏蛙。以細杖敲其首、輒哇然作鳴。或與金錢、則亂擊蛙頂、如拊雲籬、宮商詞曲、了了可辨。(王子巽が話した。都にいた時、かつて一人の男が市で芝居をやっているのを見たことがある。木で格子状になった木箱を持っていたが、十二の穴があいていて、どの穴にも蛙が伏せてあった。細い棒で蛙の頭をたたくと、ケロケロと鳴く。金をもらうと蛙の頭を幾度もたたく。それは、銅籬をたたいているようで、ドレミもメロデイも、明確に区別できるのだ。)」(第四巻「蛙曲」)

「蛙曲」とは、十二匹の蛙の頭をたたいて十二律の各音階で鳴かせ音楽を奏でさせる芸を指すと思われる。蛸洲はそのことに興味を覚えて、道を得た老人に神秘性をもたせるために、不思議な芸の使い手という設定にしたのかもしれない。

② 紫姑占い

上巻第十三話「某貴紳」に次のような場面がある。

「鼓^三掌大笑曰、欲^三聊博^二一^一、致^三却喫^二一^一。恕罪、恕罪。列位神始定。乃問曰、君^ト紫姑技倆^一耶。主人復大笑曰、騙得好、騙得好。一眼兒、僕封内所^レ出崎零也。美人乃是瀬川仙女。大兒乃是釋迦嶽。(手を敲いて大笑いして言った。「笑っていたかどうか」と思いましたのに、かえって驚かせることになってしまいました。お許しを、お許しを)。みな心はやつと落ち着いていた。そこで訊ねて言っ

た。「(古い師の)紫姑の技量を試してみたのですか」。主人はまた大笑いして言った。「うまく騙せました。うまく騙せました。一つ目の小僧は私の領内で生まれた奇形児です。美人は瀬川仙女です。大きな男は釋迦嶽です」

これは、ある公家が客人を驚かせるために、三人の人物を登場させ、それに驚いた客人が「紫姑技倆を占ったのか」と尋ねる場面である。「紫姑占い」とは、本来、日本の「こっくりさん占い」のようなものを指すが、ここでは『聊齋志異』第十卷「素秋」に基づき、布切れで作った人形を本物の人間に変える技という意味であろう。「素秋」では、主人公の兪恂九は妹と二人暮らしであるが、妹の「紫姑占い」の小技によって腰元や媪を次々と登場させて料理を運ばせる。それを兄は客人に、「これは妹が幼い時に覚えた卜紫姑の小技です(此不過妹子幼時、卜紫姑之小技耳)」と説明している。『聊齋志異』の原文を理解してはじめて解釈できる一語である。

五 『聊齋志異』に用いられた「ことば」の借用

一方、『聊齋志異』由来のことばも少なくない。凡そ作品に記されたことばは、当然、作者が多くの書を読んでいるいは耳にして知らず知らずのうちに我がものとしたもので、それによって作者独自の作品世界が形作られるものである。つまり、書かれたことばの多くは作者の中ですでに消化され血肉と化したものと言える。『蜷洲餘珠』からは、血肉と化した『聊齋志異』のことばを見出すことができる。

① 「鞞袖垂髻、風流秀曼」

前述の「紫姑占い」が記されている上巻第十三話「某貴紳」は、主人が客を驚かせるために登場させた当代きつての女形歌舞伎役者瀬川仙女の様子を以下のように記す。

「方懐惑問、一位美人手提_ニ葵花燈_一出。鞞袖垂髻、風流秀曼、曠世無_ニ其麗_一也。近以_レ燈懸_ニ擔釘_一。回眸一視、颯颯然逝。(不思議な事だと思っていると、ひとりの美人が、葵の花の提灯を手を持って出てきた。長い袖に垂れた髪、艶やかで美しく、世に並ぶ者がいないほどであった。提灯を釘に懸けて近づき、ひとたび見返ると、風のようにいなくなってしまった。)」

この美人の形容は、前掲『聊齋志異』第二卷「蓮香」中にも次のようにある。

「一夕、獨坐凝思、一女子翩然入、生意其蓮、承逆與語、觀面殊非、年僅十五六、鞞袖垂髻、風流秀曼、行步之間、若還若往。大愕、疑為狐。(ある夜、一人座つて考えていると、一人の女がひらりと入つて来る。蓮香だと思つて迎えて話ながら顔を見ると全く違つていた。年はやつと十五六で長い袖に垂れた髪、艶やかで美しく、歩く様子は、帰るようでもあり来るようでもある。大いに驚いて狐かと思つた。)」

ここに見える女性に化した狐の精の描写「鞞袖垂髻、風流秀曼」は、明らかに「某貴紳」の描写に影響を与え、『聊齋志異』に類する怪異妖艶の気分を作り出すことに成功している。

②「一市燦然」

「一市燦然」¹⁴は、市じゅうがどつと笑つたという意味であるが、『聊齋志異』第一卷「種梨」に、「田舎者が市に梨売りに行つて、道士が次々梨を生みだし皆に分け与えている術を目にして感心していたが、実はその梨は自分の物であつた。それを知つて道士を探したが、道士は、行方知れずとなつた。市じゅうどつと笑い声が満ちた」という話があり、その末尾の原文は「道士不知所。」「市燦然。」と記される。ここで「市」は、田舎者¹⁵が梨売りに出掛けて行つた地点「まち」という意味である。

『蛸洲餘珠』上巻第五話「百盲顛踏」では、けちな医者¹⁶が抗議に来た盲人たちに下駄の鼻緒を切る意地悪をした後、街中の人々が皆笑つたという文脈で用いられている。

「未¹⁷數歩¹⁸、陸續即仆。飛¹⁹筇²⁰拋²¹傘、滿服泥淖。有²²破²³鼻者²⁴、有²⁵缺²⁶齒者²⁷。」「市燦然。(何歩も行かないうちに、次々に転んだ。杖が飛びちり傘は打ち投げられ、体中泥まみれになり、鼻を切つたものもいれば、齒が欠けたものもいた。様々な滑稽な様子に、みなどつと沸いた。)」

14 「一市燦然」のうち「燦然」は、『聊齋志異』「狐諧」に「言罷、座客為之粲然」とあり、笑うこと、或は笑う様子を表す。
15 原文は「郷人」。

今のところ、『聊齋志異』以外の中国書に「一市粲然」という表現を見出すことはできないことから、蛸洲が『聊齋志異』の影響を受けて用いたものと考えられる。『蛸洲餘珠』上巻第八話「浴戸某女」では、「粲然」が「諫然」に代わっているものの、類似の語構造をとる「一市諫然」が用いられている。

「京師某乙、與_二浴戸某女_一訂_三終焉盟_二。後聞_三女有_二私夫_一。大怒夜分提_二白刃_一、擣_三其門_一入。女驚懼匿_二閤内_一。乙挨_二身入_一。女奮_レ門而走。乙追及連擊而仆。合家慴伏、莫_二敢掩捉_一。乙遂遁去。」市諫然。(京都の某乙は、風呂屋の某の娘と共白髪を誓った。しかし、後にその娘には間男がいることを耳にした。怒って、夜なかに白刃を引つ提げて家の戸をこじ開け入って行った。女は驚いて屋根裏に逃げた。乙は背を屈めて入ろうとした。女は慌てふためいて逃げた。乙は追って行って女を続けざまに打って倒した。家じゅうの者はみな懼れひれ伏して、立ち向かってとらえてやろうとする者はなかった。乙は、そこで逃げて行った。街中、大騒ぎとなった。)

「一市燦然」からヒントを得た表現であると思われる。

③「綢繆」

この「綢繆」も『聊齋志異』の影響を受けたことではあろう。『蛸洲餘珠』下第十二話「鍵櫳」の最初に「江都諸田某女與_二一僧_一綢繆。(江戸の諸田某の娘は、ある僧と親しくなった。)」とある。「綢繆」は、本来は「緊密で隙間がなく塞ぐさま」という謂いであったが、「物が纏わり付くこと」「男女の仲が良いさま」などにその義が派生していき、唐の元稹『鶯鶯傳』では「綢繆纏絶、暫若尋常、幽會未終、驚魂已斷。」と見え、夢の中で男女が睦まじく愛し合う様子を指すようになる。しかし、これ以外、仲良く睦み合うという意味ではそれほど多く用いられることはないように思われる。それが、『聊齋志異』になると以下のように多用される。

○「息燭登牀、綢繆甚至」(第二巻「蓮香」) ○「遂相綢繆」(第二巻「巧嬢」) ○「次夕、女果至、遂共綢繆」(第二巻「俠女」) ○「極盡綢繆」(第三巻「白子玉」) ○「二人綢繆如平日」(第三巻「魯公女」) ○「今與君別矣。請送我數武、以表半載綢繆之義」(第四巻「雙燈」) ○「勾欄中原無情好、所綢繆者、錢耳。」(第五巻「鴉頭」) ○「入夕、果至、綢繆益歡」(第五巻「章阿端」) ○「抱與綢繆、恩愛甚至」(第五巻「花姑子」) ○「女稍釋、復相綢繆」(第五巻「綠衣女」) ○「心悅之、欲就綢繆、實慚鄙惡」(第五巻「荷花三孃子」)

- 「兩相驚喜、綢繆臻至」(第七卷「鞏仙」) ○「急引明瑤、綢繆備至」(第七卷「仙人島」) ○「綢繆數日、益惑之」(第八卷「霍女」)
 ○「從此無夕不至、綢繆甚慰」(第九卷「鳳仙」) ○「是相對綢繆者、皆妄也」(第九卷「張鴻漸」) ○「滅燭登牀、如調新婦、綢繆甚
 權」(第十卷「恆孃」)

この例は全て男女の睦ましい行為の様を表すものといつてよい。

④「随喜」

「随喜」は、本来、「人の善を見て、それに従い喜ぶこと」を指し、仏教用語として用いられるのがほとんどである。ただ、唐の杜甫『望兜率寺』などに「時應清盥罷、随喜給孤園。(時は應に清盥は罷はり、給孤園を随喜す)」とあり、寺に立ち寄って寺院内を遊覧することを指す例もある。『聊齋志異』第一卷「画壁」にも「見客人、肅衣出迓、導與随喜(客人を見て、衣を整えて出迎え、案内してとにも巡る)」と記される。『蛎洲餘珠』上卷第十二話「画眉鳥」も、その影響を受けてか、類似の用例がある。「中元日、随喜_二東海寺_一、俄見_二彩輿過_一」。(お盆に東海寺に立ち寄って寺内を巡っていると、あでやかな駕籠が通って行くのが目にはいった。)というのがその例である。

⑤「啞聒」

下卷第十二話「鍵槍」に、「雖_レ不_レ足_レ啞_三聒于大雅_一、亦囉_三噴于一時_一」。(正式な場で歌うようなものではないが、一時流行したのであった。)という一文がある。「囉噴」は『玉篇』に「歌曲也」とあり、「啞聒」は『聊齋志異』以外に用例は少なく、ここでは「にぎやか」に音楽が起こること」の謂いで用いられ、第十一卷「晚霞」に「但聞鼓鉦啞聒、諸院皆響。(すると、太鼓や鐘がやかましく四方の庭から響いてきた)」とあり、また同じく第五卷「彭海秋」に、「踰刻、舟落水中、但聞絃管敖曹、鳴聲啞聒。(暫くして、船は水に落ちた、すると管弦の音色が聞こえてやかましいほどである)」と用いられる。

⑥「惶悚無以為地」

上卷第十六話「蜃樓」は、蜃君が以前ある小児科医に子孫を助けてもらったことを恩に感じ、その医者夫婦の苦境を救う話であるが、宮殿に招かれた夫婦の様子は次のように記される。

「王命ニ女官一拽レ之升レ階、分レ坐抗禮。二人惶悚無^レ以為^レ地。〔王は一人の女官に命じて、二人を階に登らせ、同席させて対等の礼で遇した。二人は恐縮して身の置き所もなかった。〕」

このうち、「抗禮」と「惶悚無以為地」は『聊齋志異』第六卷「絳妃」¹⁶の、夢で絳妃が礼を行おうとすると場面に、「余惶悚無以為地、因啟曰、草莽微賤、得辱寵召、已有餘榮。況敢分庭抗禮、益臣之罪、折臣之福。〔私は恐れ入ってそこで申し上げた。「草莽の卑しいものでお召しを忝くしましたのでさえ身に余る光榮ですのに、対等の礼を受けますとは、臣下としての罪を益し、臣下としての福を損なうこととなります。〕」と見え、両者の影響関係が窺われる。

⑦「屹如壁立」

『聊齋志異』第十一卷「晚霞」は竜宮城での話である。鎮江の蔣阿端という少年が水に落ちて死んだが、本人は死んだことを知らず、誰かに導かれて竜宮に到着し、群舞の練習をさせられ、そこで晚霞という美しい踊子に出会う、というもの。これは『蜃洲餘珠』上巻第十六話「蜃楼」に二つの面で影響を与えた。一つは、死んだ人間が誰かに導かれ竜宮に行くという設定であり、もう一つは、逆巻く波が四壁の如く立ち、そこに龍宮が現れるときの表現、および、そこでにぎやかな音楽が奏でられていたことの描写においてである。知らぬ間に誰かに導かれて龍宮に達するところは、「蜃楼」では「炫暫間、覺有人提其手一把握至一處。〔目が回る中、誰かに自分の手を握り引つ張られてどこかに連れて行かれたように思った。〕」とあり、「晚霞」では、「阿端不自知死、有兩人導去、見水中别有天地〔阿端は自分が死んだと知らないまま、二人の人に導かれて行き、見ると睡中の別天地であった。〕」と記される。

また、宮殿が海の水の中に俄かに現れる描写も類似する。両者ともに「屹如（若）壁立」を用いて、逆巻く波が壁のように屹立し、その中に宮殿が現れたと記している。

○「回視則流波四繞、屹如壁立。俄入¹⁷宮殿、見一人兜牟坐。（見渡すと波がぐるりととりまき、壁のように立った。すると俄かに

16 青本は、「花神」と題す。

17 青本は「現」に作る。

宮殿が現れ、上座に鎧を着た人が座っていた。」「晚霞」

○「四面碧水、屹若壁立。俄有人出自殿中、即其夫也。（四面の碧水が壁のように立った。すると突然貝の殻から誰かが出て来たが、それは夫だった。）」（「蜃楼」）

⑧「意致清越」

「意致清越」は、中年女性のすっきりした品のよさを表現した一語である。下巻第十四話「鶴塔」に、「斯日仲秋、興偶發。因隨婢往其所。初經茅屋、僅庇風日、再過曲徑、入内院。其中曲欄幽檻、金碧光耀。婦約四十五六、意致清越、喜引生坐、設茗進果。（この日は仲秋で、ゆかしさを覚えた。そこで下女に従ってそこに行つた。初め茅屋を通ると、僅かに風や日をよけるだけのものであつたが、さらに曲がりくねつた道を過ぎると、中庭に入る。その中は、凝つた作りの欄干に金や碧玉が光り輝いていた。婦人はおよそ四十五六才、すっきりとした品の良さだつた。喜んで生（桂吉）を中に入れ、茶菓を勧めた。）」とある。これは、『聊齋志異』第三卷「黄九郎」に見える「薄暮偶出、見婦人跨驢來、少年從其後、婦約五十許、意致清越（夕暮れにふと出て見ると、婦人が驢馬に乗つて、少年を従えている。婦人はおよそ五十ばかりですつきりとした品の良さである）」の借用であることは疑いが無い。

⑨その他

他にも、上巻第十二話「画眉鳥」の「思念慕切」一語は、『聊齋志異』「鳳仙」に「逾二年、思念慕切（二年を経て、思いは極まる）」など『聊齋志異』のこぼれを借りたと思われる表現がある。

六 終わりに

本論の「一はじめに」で前述したように、『聊齋志異』の日本初の翻案は、森島中良という医者であり漢学者によってなされた。中良は、白話語彙にも関心があつたようで、天明甲辰（一七八四）孟春に『小説字彙』一書を出しているが、その巻首「援引書目」には、『水滸伝』や『金瓶梅』などと共に『聊齋志異』の名が記されている。『聊齋志異』を傍に置いて編集の仕事をしていたことが想像され

る。ところで、この森島中良は、蘭学者の大槻玄沢とは同世代の友人で、蘭学の啓蒙にも力を注いだ人物であったという¹⁸。

一方、『蛸洲餘珠』の序を記し、出版に助力した人物は長崎浩齋といい、高岡で当時最も名を馳せた医者であったが、蛸洲から漢文の手ほどきを受けた人物であり、大槻玄沢晩年の弟子でもあった¹⁹。『聊齋志異』には和刻本がないのだから、数少ない原本を地方で目にするには何らかの手段で手に入れるか借用するかしかない。もしかしたら、長崎浩齋と森島中良との関わりで借用がかない、蛸洲や叔信も目にするのができたのかもしれない。

文政年間に地方の漢学者によって書かれた漢文小説『蛸洲餘珠』に、『聊齋志異』の影響が色濃く見られることに驚く。それは、この時代、『聊齋志異』のうわさが全国的に広まり、日本の各地にすでに「聊齋癖」が存在したことを意味しているのかもしれない。

小論は、平成二十七年科学研究所研究費補助金基盤研究費基盤研究（c）「漢文笑話の訳読と研究」（研究課題番号26370202 代表・磯部祐子）および平成二十七年公益財団法人富山第一銀行奨学財団「研究活動に対する助成」に江戸後期の富山における漢文学の受容と展開」（代表・磯部祐子）の研究成果の一部である。

18 石上敏「解題 森島中良について」（『森島中良集』、図書刊行会、一九九四）に見える。

19 片桐一男著『蘭学、その江戸と北陸 大槻玄沢と長崎浩齋』（思文閣出版、一九九三年）